

一月下旬、NHKのテレビニュースで「和歌山県御坊市の小中学校や幼稚園に通う子どもなど六〇〇人以上が下痢やおう吐などの症状を訴えています」と放送された。

地元報道機関の報道によると、児童や生徒の便からノロウイルスが検出された。その後の調査で、給食センターの食材からノロウイルスの検出があり、それが原因と考えられている。

あらためて、一度に多くの人を発症させるノロウイルスの怖さを感じた。

避難所で ノロウイルス患者

私の手元には、熊本日日新聞の縮刷版「熊本地震発生から一カ月」がある。そのなかの数カ所に、避難所でノロウイルス発症の記事を見つけた。

四月一九日朝刊には、「ノロウイルス感染三人、水不足の避難所・衛生注意を、熊本市」の見出しがある。掲載内容を抜粋する。

素剤をしみ込ませた布で机の隅々をふいている。

記事は別のページで、さらに補完されていた。「衛生悪化、拡大を懸念」「避難所の環境改善急務」と見出しが並ぶ。見出しの下に、衛生面に不安があるとして使用中止になった仮設トイレの写真が掲載された。

専門家の言葉として「十分な手洗いと衛生管理の徹底が必要」をあげた。記事が続いた。「現場の医師によると、着替えや入浴が不十分で、体を清潔に保ちにくい環境も要因と考えられるという」

「南阿蘇村は大規模な消毒活動を実施したほか、仮設トイレ九基のうち五基を衛生面に不安があるとして使用中止に。接触感染を防ぐため、避難所内に通路や間仕切りを設ける準備を進めている」

避難所では、ノロウイルス感染の予防が大きな課題となった。

食中毒の事例から

ノロウイルスは、感染性胃腸炎の

中臣さんの
環境衛生ウォッチング

第54回

熊本地震・ 避難所 ノロウイルス 対策

「熊本市は一八日、市内の二つの避難所に身を寄せた男女計三人がノロウイルスに感染したと発表した。避難所で感染したものではないとしているが、水が不足している避難所は衛生環境が悪く、感染症が広がる懸念もある」

密集した避難所室内、不安からの不十分な睡眠、断水して水道が使え

ない不便、屋外の仮設トイレの使用など、身体的、精神的なストレスが大きな影響を与えて免疫力を下げたことは容易に想像できる。

断水によって手洗いができない。汚れた仮設トイレの床やドアノブに触れて、手や足に便が付着する。そうした状況から、ノロウイルスに感染するリスクが高まる。

そんな懸念が現実になった。熊本日日新聞の四月二十四日朝刊一面には、「避難所で集団感染か」の大きな見出しが載った。南阿蘇村でノロウイルス二五人とある。記事は、こう続いた。

「避難生活の環境悪化と疲れが、健康に重大な影響を及ぼし始めている。：本震発生の一六日から衛生状態は悪化しており、感染が広がった可能性がある。：村は二三日、体育館の大規模な消毒を実施した」

本震から一週間経たないうちに、避難所でノロウイルスの集団感染が起きたことになる。記事に添えられてカラー写真が載った。中学生くらいの子どもたちがマスクをして、塩

た。

「児童福祉施設で多数の感染者が出ました。全寮制で、男子寮、女子寮があり、寮で食事が提供されていたのです。問題の昼食をとったのは一二五人いて、そのうち四七人が発症しました」

原因は、手洗いの不十分な調理者がいたことだった。

「問題の食事をつくる二日前でした。調理者のひとりの具合がわるくなり、診療所へ行きました。なぜか、診てもらったのが整形外科でした。そこで風邪と診断され、翌々日に出勤しました」

風邪の症状と類似していた。しかし実際には、調理者はノロウイルスに感染していたのだ。

「昼食のメニューは牛丼でした。トッピングで、甘酢、シウガなどが加熱なしで添えられました。そこにノロウイルスが付着したと思われました」

基礎知識を講義した国立医薬品食品衛生研究所の野田衛氏は、こう話した。



中臣昌広

●保健所 衛生監視員
なかとみ・まさひろ

「ノロウイルスは、吐物のなかに一〇〇万個、汚物に一〇億個います。また、ウイルスをもっている人の便には、一週間から一カ月間、ウイルスが含まれています」

トイレを使ったあとに手洗いが不十分ならば、手指を介してウイルスが広がってしまう可能性がある。

手洗いの方法

都民講座のなかで、受講生代表として手洗いの方法を体験した。

担当者が言った。

「はじめに、普段の洗い方でやってみてください。そのとき、汚れが落ちていないかを確かめるために、洗う前に蛍光剤入り液を手に塗ってください」

液が手に残っていると、ブラックライトと呼ばれる検査用の光をあてたときに青白く光るしくみである。

妻から、手術前のドクターのように神経質に洗っているねと言われるくらい、私は日ごろから入念に手を洗っている。自信があつた。

ところが、結果は

驚くばかりだった。自分の目を疑った。爪、指の外側、手の甲、手首など、青白く光る面積が多い。いままで、何をやってきたのか一気に自信がなくなった。

担当者が手の洗いの見本を示した。

「今度は、見本のとおりに洗ってみてください。そのあとに、もう一度、ブラックライトをあててみましょう」

参考とするのは、東京都のノロウイルス食中毒・感染予防ポスターだ。写真付きで手洗いのやり方が説明されている。担当者が、洗面所の前でとまどう私に語りかけた。

「水やお湯で手をぬらしてから石けんをつけて、手のひらをこすって泡立ててください。次に、手を重ねて手の甲をのばすように、こすりつけ



ます」

「その次は、指先をもう一方の手の平にあてて、指先、爪の間を念入りにこすります。それから、指の間にもう一方の手の指を入れるように手を合わせて、指の間を洗ってください」

入念な手洗いは続く。

「指を一本ずつ、もう一方の手で包みこむようにして、ねじり洗いします。そのあと同様に、手首をもう一方の手で包みこむように洗ってください」

ここまでの手順が、約三〇秒でできるようになればいい。最後に、手についた石けんを流水で落とし、ペーパータオルか清潔なタオルでふく。理想は、以上の洗い方を二回繰り返すことだ。

私は、見本のやり方にしたがって、丁寧に手を洗った。私の手にライトをかざす担当者が言った。

「指先、手首など、まだ汚れが取れていないところがありますね」

自信を取り戻すには至らなかった。

正直なところ、完全に汚れを取ることは難しいと感じた。だが、正しい手洗いを身につければ、感染まで至らない一〇個未満のウイルス数に減らすことはできるのではないだろうか。

避難所での対処

熊本地震被災地の避難所では、ノロウイルス対策に力を入れた。熊本市のある避難所の管理者は、こう話した。

「手洗いの徹底だけではなく、生活スペースに汚物が運ばれないように、土足禁止にしました。ホールの入り口に靴箱を置いて、脱いだ靴を入れてもらいました。生活スペースには、ブルーシートを敷きました」

万が一、床に吐物が落ちた場合、ふき取りと消毒がうまくいかなければ、ブルーシートそのものを交換できるのが利点だ。

前述の都民講座では、床に吐物が広がったときの対処法を学んだ。担当者が、受講生の協力者に説明した。

「作業の前に身につけるのは、使い捨ての白衣、マスク、足のビニールカバーです。使い捨てのビニール手袋は、二重にはめてください」

次に、準備するのは消毒に使う次亜塩素酸ナトリウム液、バケツ、処理物を集めるごみ袋だ。

「ノロウイルスを不活性化する〇・一パーセントの次亜塩素酸ナトリウム液をつくります。五〇〇ccのペットボトルを使った簡単な作り方です。市販の五パーセントの次亜塩素酸ナトリウム液について、五ccのペットボトルのキャップで二杯を、水に混ぜて五〇〇ccにしてください」

協力者が白いビニールシートが張られた床の上に立った。

「コップに青い着色液が入っています。吐物に見立てて、上から床に向けて勢いよく落としてください」

主に飛び散ったのは、半径約一メートルの範囲だ。だが、床をしつかり見ていくと三〜四メートル先にも青い点が、かすかにあった。思った以上に遠くへ飛ぶことがわかる。

中臣さんの環境衛生ウォッチング

「液が落ちた中心部にペーパータオルを置いて、そのまわりの外側を新聞紙で覆っていきます。このとき、消毒で、中心部のまわりに紙などで土手をつくり、次亜塩素酸ナトリウム液をかけてもいいでしょう」

つねに、まわりに飛散しないような注意が必要である。

「ペーパータオル、新聞紙で汚物をふき取り、ごみ袋を広げたバケツへ捨てていきます。取りきれないときは、ペーパータオルでふき取ります。次に消毒です。白い雑きんに次亜塩素酸ナトリウム液を浸して、床をふきましょう」

色つき雑きんは、漂白で次亜塩素酸ナトリウム液が消費されてしまう可能性があるの白い雑きんが望ましい。

ふいた雑きんは、ごみ袋に捨てる。二枚つけた外側の手袋を捨てる。最後に、身につけていた白衣、足カバー、手袋、マスクを捨てる。ごみ袋の口をしつかり結んで廃棄する。作業後の手洗いも、忘れてはならない。